

論文概要

「実践者の生活から捉える先住民文化」

—グアテマラの生活向上事業での織りの活用事例から—

学籍番号 10MD0155

助川 紋子

1. 研究の目的と方法

グアテマラの人口の半数を占めるマヤ系先住民は、スペインによる植民地支配以降、抑圧的な社会構造の中で常に最底辺におかれてきた。1996年の和平締結まで36年続いた内戦では、マヤ系先住民が犠牲者全体の80パーセントを占めるに至っている。内戦が終結し、政府が公式に多民族・多言語・多文化国家の構築を謳う現在も、先住民に対する差別と排除は継続している。所得水準にもとづく貧困率をはじめ、教育や保健に関する統計数値はそうした実態を如実に表すものである。

一方1980年代以降はマヤ知識人が中心となり、一連の抵抗運動を展開してきた。文化復興によってマヤ民族としての誇りを回復し、社会構造そのものの変革をめざす汎マヤ運動では、民族衣装や言語など現在まで存続する先住民文化やその実践が、抵抗の象徴あるいはソフトレジスタンスと見なされる。

しかしながら一部の運動家が定義する「正統なマヤ」が標準化されれば、多様な生き方をする先住民が排除され、抑圧される可能性さえあると危惧する研究者もいる。その一端を示すのが、洋装で汎マヤ運動に参加する先住民女性を、正統なマヤではないとする男性活動家の批判であり、またグローバリゼーションが進行する現代で純粋な先住民は消えていくしかないというマヤ知識人の発想である。公には抵抗の声を上げることなく生きてきた一般の先住民の日常に目を向ければ、「マヤ」として一元的には捉えられない多様な文化実践があるのではないだろうか。

そこで本研究の目的は、マヤ文化をその実践者の生活から捉える重要性を明らかにすることである。事例として先住民に対する生活向上支援を取り上げ、女性たちが担う「織り」に着目して調査を行った。日常的な営みである文化の価値が住民に再認識され、それが生活向上の取り組みに繋がっていることを示し、先住民を対象とする支援の課題と可能性を検討する。

研究方法は文献精査と現地調査である。先行研究からは、汎マヤ運動の取り組みと現状、日常生活における文化実践、先住民の多くが居住する農村部の貧困に対する国内外の支援についてそれぞれ情報を収集した。現地調査は2011年7月19日から8月19日まで、グアテマラ国西部ソロラ県サンフアン・ラ・ラグーナ市（以下、サンフアン市）で実施した。調査対象は支援を実施する現地NGO職員と、支援を受けて手工芸品の生産と販売に従事する織り手女性とし、調査手法には半構造インタビューと参与観察を用いた。

2. 論文の構成

第一章では、研究の背景と問題の所在、研究目的と方法、論文の構成について記した。

第二章では、内戦終結を区切りとして汎マヤ運動の取り組みと現状を整理した。第一節では、運動が出現する歴史的背景や具体的な活動、和平協定の締結に運動が果たした役割を記述した。第二節では、汎マヤ運動の指導者層が参加する多文化国家構築の現状から、一部の運動家による取り組みが、果たして先住民の多様な声を反映するものだったのかと問うマヤ知識人や汎マヤ運動研究者らの指摘を挙げた。

第三章では、ローカルなレベルでの先住民文化の実践に焦点をあてた。第一節では、和平後の「マヤのための政治」や、先住民のアイデンティティの拠り所として汎マヤ運動でも重視される言語に対する先住民の見解をいくつかの事例から示した。第二節では、先住民のアイデンティティの多層性やその戦略的利用を描いた民族誌を取り上げた。第一節の内容とあわせ、汎マヤ運動が構築をめざす「マヤ」という民族意識が一般の先住民の間に浸透しない背景を分析した。

第四章は農村部の貧困問題を切り口に、第一節及び第二節で、先住民が取ってきた生存戦略や国内外からの支援の現状について整理した。第三節では、ローカルなレベルで活動する非政府組織などの役割と共に、地域や文化を、開発対象地域に居住する住民の固有価値として捉える開発概念を挙げ、先住民支援における有効性を述べた。

第五章では、事例調査の結果を記述した。第一節から第四節までは、調査対象や手法の詳細と、調査地及び現地 NGO の支援の概要、調査地における手工芸品セクターの現状を整理した。第五節は、生計手段であると同時に伝統文化である織りや、その担い手としての役割が織り手によってどのように認識されてきたのか、それが支援を経てどのように変化しているのかを述べた。生計手段としての織り、「自分の仕事」としての織り、文化としての織りと大きく3つに分類して、筆者との対話という形式で織り手の語りを記述した。

第六章では第五章の内容を考察し、外部支援者の介入や観光客という織りの買い手との交流が、日常的な営みであった織りへの織り手の認識や行動に変化をもたらしていることを述べた。

第七章では、本研究における全体の議論をふまえて、実践者の生活から先住民文化を捉える視点がマヤ系先住民への支援において持つ重要性とその可能性を検討した。

3. 論文の概要

本研究で、実践者の生活から先住民文化を捉えることで明らかになったのは、文化の意味や価値を決めるのは、それを実践する先住民にほかならないということである。ごく当たり前のことではあるが、農村の伝統的な生活の変容とともに「純粋な」先住民や文化は消え去ってしまうという発想は、文化を実践する当事者の主体性を見えづらくしている。

第二章で述べるように、歴史的に虐げられてきた先住民自らが、マヤとして誇りをもって参加できるような社会を築こうとしてきたのが汎マヤ運動である。内戦終結に向けた和平交渉での運動家の働きかけは、最終的な和平合意に「先住民のアイデンティティと権利協定」が加えられるという成果をもたらした。先住民はラディーノ（混血）になるべきという言説が自明となってきた社会的背景を考慮すれば、汎マヤ運動の意義や貢献に疑いをはさむ余地はないだろう。また先住民への差別や貧困が継続する現状は汎マヤ運動のみに帰されるものではない。現在でも、政府の中枢を占める大半は、先住民を発展の阻害要因と見なしてきた非先住民層である。「うわべだけの多文化主義」と批判される支配層とマヤの関係は一朝一夕に改善できる問題ではない。

その一方で、国政レベルで構造的・制度的改革をめざす汎マヤ運動家と、農村の一般の先住民との乖離が指摘されているのも事実である。停滞する汎マヤ運動の今後の発展を、これまでマヤとして「正統」とは見なされてこなかった地域的な取組みに見る研究者もいる。第三章で焦点をあてるのは、そうしたよりローカルなレベルでの文化実践である。

和平後の「マヤのための政治」や多文化主義の取組みに必ずしも一般の先住民が理解を示していないのは、それらの取組みが周知されていないからだけではない。国政レベルで一元的に定義される「マヤ」や「マヤ文化」に基づく政策と、日常的に実践され重視される文化が一致するばかりではないからである。汎マヤ運動がめざす統一のマヤ民族意識の構築も、一般の先住民に必ずしも手放しで受け入れられる取組みではなく、むしろ拒絶されることもある。こうした認識のずれは、22の言語集団に細分されるマヤ系先住民の生活が、それぞれの異なる歴史の上に成り立ってきたことを表している。先住民文化の存続が抵抗の象徴と見なされる一方で、実践者である先住民自身が、環境に応じてときに文化を変容させ、また存続させるべき文化的要素を取捨選択してきた。「マヤ」が浸透しない背景には、そうした実践者の個々の歴史がある。

異なる環境を生きてきた先住民の経験を肯定的に捉える可能性を示すのが第四章である。先住民の貧困削減という観点からは、経済指標のみでは測れない多様な貧困の実態を捉える必要性が指摘されている。その一方で、地域文化開発やテリトリーアプローチ型農村開発といった開発概念は、地域や文化を住民にとっての固有価値として捉え、地域開発に活用していくことを提唱している。個々の歴史の上に成る文化は、まさにその地域に住む先住民にとっての固有価値であり、生きるために先住民が経験的に培ってきた能力を示すものである。つまり多様な実態の把握には、人的資源も含む有効な地域資源の把握という視点を加えることが可能である。

先住民文化を、実践者にとっての固有価値という視点で捉えるのが第五章、第六章の事例調査の結果とその考察である。調査地では、織りが従来から女性の生計手段として重視されてきた。外部支援者の介入の意義は、日常的な織りの営みに品質向上の取り組みや販売方法の変化という新たな要素が加わったことで、織り手自身が織りの価値を再認識するに至ったことにある。

仲介業者への委託販売では、織りから得られる収入はごくわずかなものだった。しかし支援を通じて、織り手自身で店舗を経営しながらより適正な価格で織りを販売できるようになった。子どもに教育を受けさせるという具体的な目標の達成を可能とさせる織りは、今や誇るべき「自分の仕事」あるいは「専門職」である。何より、織りで生活を支えているという実感は、材料費の高騰など不利な状況でも織りを継続させていこうという織り手の積極的な行動に繋がっている。さらに織りは単に現金を稼ぐ手段ではなく「自分たちの生活を支えてきた文化」として認識されている。これまでも織りの技術は母から娘へと継承されてきたが、自文化としての織りの価値が再認識され、そうした意味の継承までが望まれているのである。そこには織りを営んで生きてきた個人の歴史までもが再価値化されるプロセスがあると言える。

手工芸品販売による収入確保が重視される一方で、観光客という買い手の存在は、織り手に新たな楽しみをもたらしてもいる。自分の出来る技術の範囲で織って仲介業者に売り渡していた頃は、それがどのように加工され、どこで販売されるのかにまで織り手が関与することはなかった。店舗で観光客に直接販売する現在は、製品の品質が収入に直結するため、品質向上への取り組みにも意欲的である。加えて町をあげての観光地化で、外国人の姿が日常的に見られるようになり、織り手が店舗で直接観光客と接する機会も増えている。自らの織りを望んで買って行く買い手の顔が見えるようになり、織り手は、手工芸品の経済的側面以外の価値をも実感するようになっていく。自分の織りが買い手にどう評されるのかまで想像する楽しみは、以前は得られなかったものである。また外国人の持ち物からデザインのヒントを得たり、直接好みを尋ねたりと、工夫を凝らした生産が行われるようになっている。それが売れるものをつくるという経済的動機に基づくものであれ、生活環境の変化は個々人の織りに反映され、より品質が高く創造的な生産に繋がっている。

こうした調査結果が示すのは、織り文化が、伝統性の継続ではなく織り手の生活との密接な関連で持つ価値である。収入向上という具体的な成果を通じて織り手が織りの価値を再認識したことは、生活向上への取り組みだけでなく自文化への見方にも肯定的な変化をもたらしている。さらに家族や観光客など、自分の織りを必要とする他者の存在も織り文化の継続には重要な要素である。文化が他者と共有されて価値を持つのであれば、そうした機会を生み出した点にも外部支援者の介入意義があったと言える。いずれにせよ、生活のために観光客に売ることを目的に織る織り手もまた、織りという先住民文化の一端を担っているのである。

本研究では、文化実践の主体として先住民を捉える視点が開発支援の現場でどう活かされるのか、具体的な見解を示すまでには至らなかった。また事例としては手工芸品販売による収入向上支援を取り上げたのみであり、織り以外の文化が所得確保とは異なる方法で先住民の生活向上にどのような影響をもたらすのかについては更なる研究が求められる。しかしながら、先住民文化を実践者の日常に目を向けて捉え、さらに日常の一部としての開発支援の現場における文化実践やその変容の一端を示した点に本研究の意義がある。